

「ビール、配りまゝす」

1泊2日・J Aバスの旅同乗記

春

の日差しを感じながら、A子はバスに揺られていた。J A（農協）の1泊2日の招待旅行。行き先は、伊豆。というのも、参加するはずだった母親の友人が急にキャンセル、モッタイナイので、どう一緒に……と、暇なA子にお声がかかったのだ。

「ビール、配りまゝす」と、役員の声。真昼間から、イキナリである。「適当にゴソツと取って前に回して」と、後ろからは、誰が持つてきたのかシャレたつまみが回ってくる。「うちになったリンゴだから」と果物ナイフ持参で、剥いている人もこれが、バス旅行の醍醐味だ。周りを見渡せば、オバサン、いや、おばあさんばかりだ。母曰く「あなたがいなければ私が最年少なのよ」と。

妙に気分が華やいている。

バスに揺られて、4時間。ようやく伊豆に入り、昼食。バスから降りて、店内に入るのだから、とにかくオバサンたちは行動がはやい。あたふたとA子が最後に席に着くと、目の前にはエビ・カニ盛りたくさんちらしご飯。

「どれから食べようかな〜」なんて考えて、ふと横をみると、オバサンの皿の上は、すでに半分だ。

「パツパツパツと上つ面のエビやカニとか重要なところだけ食べるのよ。そうしないと時間、ないから」とアドバイスされた。旅慣れているらっしやるのよね。

その後、一行は下田開国博物館へ。歴史好きかなA子が、じっくり見て

回っていると、気がつけば誰もいない。急いで外へでると、オバサンたちはさっさとバスに乗っていた。「そんなことってあり？」という感じなのだ。

その点、買い物となると、あれこれ手にとり、カゴの中へ。迷いもなく、鮮やかな手さばき。堂に入ったもの

定期演奏会の「字幕試写」 3時間鑑賞の果てに

「あ
ほしいんだ」

合唱サークルに所属する友人のY子から声がかかったのは、昨年のことだった。話を聞くと、定期演奏会で披露する曲のことだという。それを翻訳した字幕も自分たちでつくのね、とY子。どうやら、観客にわかりやすくなっているか確認する過程があるらしい。

である。「これは会社の人に、これは子どもに」と、頭の中で分けられているのだ。

「とにかく、オバサンに学ぶべきことは多かったのよ」と言いふらすA子。でも、やっぱりオバサンにはなりたくないのが本音である。

(花)

「いいよ、行くよ」と返すと、黄色い声が上がった。人を集めるのに苦勞するようで、彼女の喜びもひとしお。「3時間くらいかかるよ？」と念を押されたときには、ココロの内でもそれを先に言っただけ、と思わないでもなかったが、ビシビシ指摘してくれて構わないからね、と満面に笑みを浮かべているY子を見て、なんだかこちらまで嬉しくなってしまうのも事実である。

ampus
NoW

——1週間後、「じゃ、行こか」。

授業が終わってから、Cスクの会議室にこもる。いざ、とばかりにかけ慣れないメガネも装備。おもむろにパワポでの試写が始まる——。

……ふう、やつと終了。自分たちでプロデュースするつてすごいなあ、なんて考えながら、自分の役目を果たそうと促されるまま気になったところを挙げていく。

と、私の目に入ってきたのは「帰り支度」をするY子の姿。まさかね、とは思ったけれど。出口に向かい

つつ、「お先に失礼しまー

す」と言う彼女の元気な声を耳にした私は、目を丸くする以外に何ができただろう……。

他のサークルの字幕の編集というめつたにない体験が中大内でできたのはうれしい。Y子ありがとう。でも、旅は道連れ、世は情——じゃなかったかなあ。

「待つてよー、Y子」
ああ、「情緒よ、君は帰らざるか」
(朔太郎) ナンテね。 (然)

銀座の夜の物語 バー初体験、2人の男に声かけられて

大 人の街・銀座の夜。バーでイ

ベントがあるから行こうよ、と友人に誘われ、S子は20歳にしてついに「バー・デビュー」を果たした。「異業種交流会」のようなものだ

と予め聞いていて、友達とともに
メイク・服・髪に気合を入れて出陣。
「今は冬。まさに出会いの氷河期だし、願ったり叶ったりのイベントよね。素敵な社会人との出会いがあるといいな」とノリノリである。
会場のバーに入ると、薄ぼんやり



とした照明の下、数人ずつでかたまっている若者たち。狭い会場に、すし

詰め状態1歩手前くらい混みようだから、立ちのぼる熱気にクラクラしそうなになる。だからみんな薄着なのね、とノースリーブや半袖の軽快な装いの人たちを見て、ナルホドと地方出身のS子は納得する。

テレビの中ではなく、初めて目の前で見る、バーテンのお兄さん。大きな動きで、シヤカシヤカと何かをシヤッフルする。「うわあ、すごい！

あの素早い手の動き、見てよおー！」とS子の興奮の度合いはもう最高潮に。その声がかき消されるほど少人数ずつの固まりは盛り上がっている。バレンタインデーが近いとあって、「バレンタイン」という飲み物をオーダー。お洒落な感じ……。知らない男性と話した。非常にハイテンションの関西弁で話しかけてきた人は、やることも独創的だ。一

口サイズのチョコの包み紙の裏に、自分の名前や連絡先を書き、それが飛び出る仕掛けになっているんな女の子に配っている。

「朝からめつちや頑張ったで」とか言つて。それで出会いの芽が花咲くかは、微妙だ。当然である。悩み相談めいたことをしてきた人もいる。

「こういう知らない人ばかりの場合、苦手なんだよね」「自分から話しかけにいかないよ」

「じゃあ、なぜここに來てるの？」
とつっこみたくなる男。帰る前、どちらの人にも連絡先を聞かれ、頑なに断るのもどうかと思い、しぶしぶ教える。「これつきり関わらなそうだものね」と友達と目配せしながら。

こういうイベントに來る人つて、変な人が多いね、と2人は帰りの電車で語り合った。合コンもしてみたいと思つていたけれど、結局同じよ

うなものなのだろうな。あーあ、期待するんじゃないかった。

それでも初めてのバー体験である。

そして学んだこと——素敵な出会い

は、身近なところにこそある。そう

よね、いつの間にか自然とそこにある。そういうのこそ、大事にしなきゃね。

2人は、すこし大人になった、の

かな。

(五)

22歳の冒険——初めての映画館

選んだ映画はモチロン「犬神家の一族」

「あゝまぶしい」と、ぐーん

ち上がった。きょうは映画館にきて

いる。

じつは、22才にして初めて映画に

行ったのだ。その記念すべき第一作

に選ばれたのは、「犬神家の一族」。

「わたし、映画観たことないのよ

ほら、すぐにテレビで放映される

じゃない。だから、わざわざ行かな

くてよ」というのが、彼女の口ぐせ

そんなスボラなA子だったが、つい

に行く気になった。何があったのか

まず、「映画を観に行つたことが

ない」と周囲に話すと、最初は「え

〜！」と驚かれ、それが半ば快感で

もあったのだが、近ごろはその反応

にも飽きてきた。つぎに、

家の中でも三女がやたら

彼氏と映画に行つた話題

をだし、羨ましくなって

きたのだ(じつのところは、

映画よりも彼氏のほうが

ウラヤマシイ?)。そし

て、あこがれの松嶋菜々

子出演、巨匠市川崑監督

といった面々にミ〜ハー

A子はいてもたってもい

られなくなったのだった。

チケットの買い方も分からないの

で、友人Yをひき連れ、いよいよ映

画館へ。プーっというブザーを聞く

と、胸は高まった。「初めは、広告

が流れるから」とYは慣れた口ぶり

だけど、A子にとってはすべて新鮮

なのだ。約2時間半の上演が終わり、

エンドロールまできちんと観たふた

りである。

こちらの様子になったのか顔

を向けたYに、A子は言った。

「結局、犯人はなぜ殺

人をしたの?」

「あ、たしかに。なん

でだっけ」

一睡もしていないのに、

どつちもまるで理解して

いない。

帰りの車内でも、ふた

りの頭の中では犬神家の

家系図とキャストがぐる

ぐる回っているあんばい。

帰宅後、やはり気になって「もう

1回観る」と言い出したA子に、ナ

マイキな三女があきれ顔で言つたら

しい。「バカじゃない。そういう人

いるのよね〜。2度も3度も観にい

く人が」と。

後日、A子はこつそり本屋に行つた。

「この手があるわ。これなら後戻り

して読めるからね」、しめしめとい

う顔で。

いまでも彼女の手帳には、「犬神家

の一族、シネマ3、15・50開映」の

チケット半券が挟まっている。「映

画が本当にうれしかったのね」と周

囲は、微笑むばかり。

邦画の興業収入が21年ぶりに洋画

を上回つた、というニュースを実感

させる、初々しい「美談」である。

(微)

